

インターネットを介したいじめの理解と対応に関する臨床心理学的展望

—— 青年期のネットいじめに注目して ——

修士課程 1年 浦野由平
 博士課程 1年 河合輝久
 修士課程 2年 遠藤麻美
 修士課程 2年 高木郁彦
 教授 下山晴彦

はじめに

青少年のいじめは、青年期の健康な発達に様々な悪影響を及ぼす可能性がある、深刻な問題である。これまでいじめは主に学校の敷地内で発生することが想定されていたが、近年はインターネットの普及を背景とし、「ネットいじめ cyber bullying (以下、CB)」が注目され始めている。CBは、“携帯電話やインターネットなど、現代の通信機器を通して行われる攻撃行為” (Slonje & Smith, 2008) などと定義される。文部科学省 (2006) による全国の小中高生を対象にした調査によるといじめ全体の3.9%にあたる4883件がCBであり、2012年度に行われた同様の調査ではCBの認知件数は全体の4%にあたる7855件であった (文部科学省, 2013)。このように、パソコンや携帯電話等を使ったいじめ行為の認知件数は増加しており、CBは日本だけではなく、諸外国においても問題として取り上げられるようになってきている。例えば、イギリスのNCH (2005) が770名の11-19歳の子どもを対象に行った調査によると、20%の子どもがCB被害にあっており、アメリカでは、インターネットを利用する12-17歳の子供のうち、過去1年間に1度以上CB被害を受けた者が72%に上ったとの報告 (Junoven & Gross, 2008) がある。このように、CBは国内外の思春期・青年期における新たな問題として位置を占め始めていることが窺われ、CBの実態把握と発生メカニズムの解明に加え、CBの発生に対する予防・介入法の策定は急務といえる。

青年期にみられるCBをめぐる、本論考では2部構成で検討を行う。第I部では、まず本論考でのCBの位置づけを明らかにし、青年期を対象としたCB研究で指摘されている実態や特徴を整理する。第II部では、現在、国内外で行われているネットいじめに対する予防・介入

の方法に関する研究を概観し、それらの課題と展望について論じる。なお、本論考における青年期とは、思春期をそのうちに含む広義な意味での青年期を指す。これら2つの検討を通じて、本邦におけるCBの発生メカニズムの理解とCBへの効果的な予防・介入法について示唆を得ることを目的とする。

第I部：CBの実態と関連要因について

1. **CBの種類** これまでの研究でCBは、使用されるメディア媒体の種類 (e.g. Ortega, Elipe, Mora-Merchan, Calmaestra, & Vega, 2009; Smith, Mahdavi, Carvalho, Fisher, Russell, & Tippet, 2008) や、行為の種類 (e.g. 安藤, 2009; Rivers & Noret, 2010) によって分類されている。

Ortega et al. (2009) は、CBを、インターネットを使用するものと、携帯電話を使用するものの二つに分類している。しかし近年のスマートフォンの普及によるインターネットアクセスの簡便さを鑑みると、この分類は時代に即したものではないと言える。Smith et al. (2008) ではより詳細に、CBにおいて用いられるメディア媒体を、携帯電話・写真やビデオの掲載・Eメール・チャットルーム・ウェブサイトなど7つに分類している。使用されるメディア媒体は時代とともに急速な変化を遂げてきており、その都度新たな形のCBが発生しうる。また、多く用いられているSNSやICTを用いたコミュニケーション手段は文化により異なることが予想され、日本におけるCB理解のためにも、国内で多く用いられているメディア媒体の把握が望まれる。

River & Noret (2010) は、悪質なテキスト・メッセージやEメールの内容を、身体的暴力の脅迫・敵意のある悪口・殺しの脅迫・性的行動・要求/指示・現有の関係

性にダメージを与えるという脅迫・家族／家庭への脅迫等の10のカテゴリーに分類した。また、日本で行われている数少ない調査研究の一つである安藤（2009）はネット上のいじめ行為を、①からかい、②噂を流す、③わざと傷つける、④脅すなどの行為に分類しているが、これは国外での先行研究の概観や中学校教員・生徒との話し合いにより作成されたものであり、国内の実証研究をベースにした分類ではない。CB行為の様相は文化により異なることが予想されるため、国内におけるCB行為のバリエーションの把握が望まれる。

2. CBの位置づけ CBは、従来型いじめ traditional bullying（以下、TB）同様、子供たちに心理社会的な悪影響を及ぼす可能性が高いこと（Campbell, 2005）が指摘されているが、CBをTBの延長線上にある現象として捉えるか、TBと共通点を持ちながらも、TBとは独立した現象として捉えるかについては、様々な議論がある（e.g. Chisholm & Day, 2013; Olweus, 2012）。CB被害者の多くがTB被害も受けていること（Junoven & Gross, 2008; Kowalski & Limber, 2013）や、CBとTBがともに、抑うつ（Bauman, 2008; Wang, Nansel, & Iannotti, 2011）や学校での問題（Andreou, 2001; Beran & Li, 2007）に関連していることが指摘されているように、これらの現象は多くの共通点を持っている。一方、CBはTB以上に、その被害者の抑うつ程度（Bonanno & Hymel, 2013）や学業成績（Kowalski & Limber, 2013）に悪影響を及ぼすことなど、CB特有の影響を示唆する研究もあるが、これらの悪影響がCB被害のみからくるものなのか、CB被害とTB被害の両方を経験することからくるものかを結論づけている研究は見当たらない。

そのような中、長年いじめを研究してきたOlweus（2012）は、CB被害のみを経験している者の割合がいじめ経験者全体の中でも少ないこと、また、メディアによる注目度が高まっているわりにCB被害経験者が増加していないことから、CBを独立した現象として捉えるよりも、これまでのいじめの文脈の中に位置づけて捉えることが現代のいじめ理解に有効であると指摘している。いじめの様相に文化差があること（e.g. 森田, 2001）を鑑みると、この指摘を国内のCB理解に直接応用することはできないが、日本においても現実空間の人間関係をベースにしたネット空間におけるいじめが注目を集めている現状（e.g. ベネッセ教育情報サイト, 2013）があることから、本論考ではOlweus（2012）の指摘にしたがい、CBをこれまでのいじめの文脈の中に位置づけ、TBとの比較を通して論じる。

3. CBの特徴 ここではTBとの比較を通じたCBの特徴の明確化を行うため、いじめの特徴が具体的に記述されている下記の定義を採用し、CBの特徴について論じる。Olweus（1993）はいじめを、抵抗できない生徒に対して繰り返し、長期にわたって、一人または複数の生徒が意図的に攻撃を加えることとしている。この定義によれば、いじめと他の攻撃行動を分かつ特徴は、①行為が意図的であること、②行為が反復的であること、③被害者と加害者の間に力の不均衡があること、であると言える。これらTB加害の特徴と、ネット空間の特異性を踏まえ、以下にCBの特徴を整理する。

これらTB加害の特徴のうち、①は、CBとネット空間におけるそれ以外の行為を分かつ特徴でもあることがいくつかの研究により示唆されている（e.g. Vandebosch & Van Cleemput, 2008; Menisini, Nocentini, Palladino, Frisen, Berne, Ortega-Ruiz, Calmaestra, Scheithauer, Schultze-Krumbholz, Luik, Naruskov, Blaya, Berthaud, & Smith, 2012）。加害者が他者を傷つけることを意図していない限り、それはCBではなく「サイバー・ジョーク cyber joke（ネット空間での冗談）」と認識される（Vandebosch & Van Cleemput, 2008）ようである。TB加害とCB加害の相違点は、②と③において見受けられる。

行為の反復性 Olweus（1993）は行為の反復性をいじめとそれ以外の攻撃行動を分かつ基準の一つとしているが、ネット空間における行為の反復性は現実空間における行為と比べてわかりにくく、理解が難しい（Slonje, Smith, & Frisen, 2012）。ネット空間や活用されるテクノロジーの性質上、CB行為（e.g. 書き込み、メール）は加害者の統制下から離れ、様々な形で反復され得る。例えば、ネット空間において写真やビデオを載せる、SNSやブログにコメントを載せる、メールを送るなどの行為を一度でも行えば、ネット空間の性質上、写真やコメントは第三者により閲覧・転送される可能性がある。載せられたコメントやメールに第三者がアクセスし、閲覧・転送すれば、加害者により行われたCB行為が単回性のものであったとしても、被害者には反復的な傷つきとして体験されるであろう。TBでは加害者本人の行為の反復性が特徴として強調されてきたが、CBの場合は加害者だけではなく第三者である傍観者も行為の反復性に加担する可能性があると言える。そのため、CBへの対応を考える際は、被害者と加害者に加えて、第三者である傍観者を含めた現象理解が望まれる（Grigg, 2010）。その際は、現実空間におけるTBとは違い、ネット空間で生じるCBの場合はいじめの傍観者が無数に存在しうるこ

と、また、そのことから傍観者の質がTBとは異なる可能性についても考慮する必要があるだろう。

力の不均衡 力の不均衡は、何らかの意味で力を持つ者が自身より力の弱い者をターゲットとしていじめを行いやすいことを表す。力の不均衡により被害者は加害者に対して無力感を感じ易く、自らを守ることが困難になる (Olweus, 1993)。現実空間においては、人気、身長、頭の良さ、身体的強さ、年齢、性別などの特徴が明らかたため、被害者と加害者は両者の間にある力の不均衡を認識しやすいが (Langos, 2012)、ネット空間における加害者・被害者間の力の不均衡はこれほど明白ではない。そのような中、ネット空間における力の不均衡は、通信機器やネットを活用するスキルやそれらについての知識の差によって生じる (Smith et al., 2008; Vandebosch & Van Cleemput, 2008) との指摘がある。誹謗中傷メールなどは最低限のスキルで行うことができるが、他者のアカウントを乗っ取るなどの行為は高いネット活用スキルを要する。このように、ネット活用スキルの高さはネット上における力の不均衡に寄与しているかもしれないが、①子どもの間で大きな問題となるCBはメールを送る・コメントを載せるなど、高いネット活用スキルを要さないものであること、②ネット上でいじめる・いじめられる者の双方は、ネットや通信機器について同等の知識を前提として持っているからこそ、ネット上でいじめる・いじめられているのかもしれない (Grigg, 2010) ことなどから、通信機器やネットを活用するスキル・知識の差が力の不均衡を発生させる主要な要因であるとは考えにくい。Vandebosch & Van Cleemput (2008) は、ネット空間の特徴である匿名性もCBにおける力の不均衡に寄与していることを指摘している。加害者・被害者がお互いを特定している場合には、現実空間における力の不均衡が直接ネット空間にも影響するかもしれないが、匿名性を特徴とするネット空間においては、被害者が加害者を特定できないこともある (Kowalski & Limber, 2007; Slonje & Smith, 2008; Li, 2006)。そのため、普段は明白な力の不均衡から学校ではいじめ被害を受ける者も、ネット上では加害者となり得る (e.g. Beran & Li, 2007)。加害者を特定できない場合、被害者や周囲の者がいじめへ対応することが困難となるため、被害者に無力感が生じる (Vandebosch & Van Cleemput, 2008; Slonje & Smith, 2008) ことが指摘されており、匿名性がネット上の力の不均衡に寄与する要因の一つと言えるだろう。

以上のように、TB加害とCB加害はいずれも他者を傷つけることを意図した行為という特徴を有しているが、行為の反復性と加害者・被害者間の力の不均衡の様

相は異なるようである。

4. CB行為の関連要因

年齢と性別 Tokunaga (2010) のレビューによると、CB被害が最も多くみられるのは7年生と8年生 (13歳-15歳くらい) の子どもにおいてであった。文部科学省 (2013) が行っている調査においても、CBの認知件数は中学生において最も高く (3700件)、次いで高校生 (2401件)、小学生 (1679件) であったことから、国内外において、中学生が最もCBとの関わりが多い年代であることが示唆されている。性差については、研究により示される結果は異なる。男児が女児よりもCBに関わっていることを示唆する研究 (e.g. Calvete, Orue, Estevez, Villardon, & Padilla, 2010; Fanti, Demetriou, & Hawa, 2012)、女児が男児よりもCBに関わっていることを示唆する研究 (e.g. Li, 2006; 安藤, 2009; Rivers & Noret, 2010)、性差があまり見られないことを示唆する研究 (e.g. Beran & Li, 2007; Smith et al., 2008) がある。しかし、仲間はずれなどの関係性攻撃が女児に多いこと (e.g. Crick & Grotpeter, 1995)、また、関係性攻撃がネットいじめ・いじめられ体験と直接関連していること (内海, 2010) を踏まえると、CBにおいて女児の関与度が比較的に高いことが推測される。

心理社会的要因 CBに関連する心理社会的要因を検討した安藤 (2009) では、学校への適応、道徳観、及び保護者の関心が低い生徒はCBの加害・被害の両方を経験した群に分類されやすかったと報告している。国外の研究を概観すると、CB行為に関わっている者はそうでない者に比べ、ネット外はいじめ被害を受けやすく、飲酒・喫煙、身体的・性的攻撃、及び怒りを伴う加害を行いやすく、かつ保護者の関心が低い (Ybarra, Espelage, & Mitchell, 2007) こと、学校生活が安全だと感じられない (Sourander, Klomek, Ikonen, Lindroos, Luntamo, Koskelainen, Riskari, & Helenius, 2010) ことや薬物乱用などのリスク行動に関連している (Gamez-Guadix, Orue, Smith, & Calvete, 2013) ことが報告されている。TBにおいても、いじめ被害/加害行為に関わっている者はそうでない者に比べて、同様の心理社会的不適応を示す傾向のあることが指摘されている (e.g. Haynie, Nansel, Eitel, Crump, Saylor, Yu, & Simons-Morton, 2001) ことから、TBの被害・加害行為との関連を示す心理社会的要因がCBの加害・被害行為にも同様に関連していることが推測されるが、いくつかCB加害に特有の関連要因も見受けられる。例えば、CB加害者はそうでない者よりもインターネットを長時間使用しており

(Erdur-Baker, 2010)、それに加え、CB 加害とオンライン上の問題行動との関連 (Bauman, 2010; Gamez-Guadix et al., 2013) が指摘されている。そのため、子どもへの早期のメディア・リテラシー教育がCB 加害の予防やCB 加害者への介入に有効なのかもしれない。

第II部：CB に対する介入とその効果研究について

第II部では、CB に対する介入やその効果研究を概観した上で、先行研究の課題と今後の展望について述べる。CB に対する介入としては、TB に対する既存の介入プログラム、インターネットを介した既存の学習プログラムを応用した介入、CB に特化した介入があるが数は少なく、その効果研究となるとさらに寡少である。

CB に対して、TB への介入プログラムが適用されている例として、フィンランドのTurku 大学が開発した“KiVa” (KiVa Anti-Bullying Program, 2012) という学校単位のいじめ対策プログラムを用いたものがある (Williford, Elledge, Boulton, DePaolis, Little, & Salmivalli, 2013)。これは、一般型の方策、特定型の方策の2つから成るプログラムである。一般型の方策とは、学校の全生徒を対象に、①グループがいじめを維持する役割を担っているという認識を高める、②被害者に対する共感性を高める、③被害者をサポートする方略の習得を促し、その自己効力感を高める、の3点から成る学級単位のレッスン (レッスンには、インターネットを通して生じるいじめの説明やサイバーコミュニケーションにおける他者を尊重した適切な行動についての話し合い、CB への対応も含まれる) である。特定型の方策とは、学校職員がいじめを認識した時に行われるものであり、学校のKiVa プロジェクトチームと生徒の間の個別、グループ面接を通して各事例が扱われる。KiVa について Williford et al. (2013) は、①CB 加害に対してKiVa による低減効果が認められるか、②教室レベルでの現象として捉えられるか否かが不確かであるCB 加害や被害に対して、教室の規範をターゲットとするKiVa に独自効果がみられるのか、③対象が中学生であってもKiVa によるCB への介入効果が認められるか、以上3点について検証している。その結果、①と②についてはCB 加害に対するKiVa 独自の効果は年齢次第であり、年齢がサンプルの平均年齢よりも1標準偏差低い者ほどいじめ加害頻度が低く、その効果量は中程度であった。一方、CB 被害に対するKiVa の独自効果は年齢・性別問わず認められた。③については、中学生におけるCB 被害に対して

KiVa による低減効果が認められた。Slonje, Smith, & Frisén (2012) は、この他のCB に対する介入効果が期待できる既存のいじめ対策として、BeatBullying を挙げている。BeatBullying とは、オンライン上で互いに支え合ったり助け合ったりするウェブサイトである。当該サイトには、サイトの案内役である“Buddy”、サイト内のメッセージや書き込みを検査する“Moderator”、利用者に援助を提供する“Counsellor”の他、BeatBullying のスタッフからいじめに対抗したり予防したりするための知識やツールについて対面トレーニングを受けた11-17歳の“Mentor”が存在するのが特徴である (BeatBullying, 2002)。Banerjee, Robinson, & Smalle (2010) は当該サイトを導入した中学校8校を対象に、Beating-Bullying を学校に紹介することの意義を明らかにするためのインタビュー調査を行っている。その結果、最も明瞭な影響として、生徒や教師の双方がCB を含むいじめへの気づきが促された点であったと報告している。大人による子どものインターネット利用に対するモニタリングが低いほど、その子どものインターネット上での攻撃行動が高まる可能性があり (Ybarra & Mitchell, 2004)、BeatingBullying は大人が子ども達の間で展開されているCB を早期発見できる可能性があることを示唆した結果といえる。

既存のインターネットプログラムを応用した取り組みとして、Lee, Wu, Svanstrom, & Dalal (2013) が用いたWebQuest が挙げられる。WebQuest とは、学習者が学ぼうとする全ての情報がウェブから収集され、それらの情報を学習者が探索的に学ぶことができるような学習フォーマットである (WebQuest, 2007)。島田・ハリソン (2001) によれば、WebQuest は、学習者に様々な情報源を提供しそれを使ったタスクを与え、学習者はそのタスクを行うことを通して、自分にとって意味のある答えを他人と確かめ合いながら学習するといった構成主義に基づいており、①イントロダクション、②タスク、③プロセス、④リソース、⑤評価、⑥まとめ、の6つの内容から構成されているという。Lee et al. (2013) は、各段階に沿ってCB について学習してもらうことによって、高校生におけるCB に対する予防効果について、準実験デザインを用いて検証している。その結果、統制群に比べ、介入群のCB に関する知識の尺度得点が高まり、その効果は介入実施2週間後においても認められたとしている。また、CB 加害意図については、統制群よりも介入群の方が低く、その効果は介入実施2週間後においても認められたが、CB に対する態度については、介入群と統制群の間で有意差はなかったとしている。

CBに特化した取り組みとして、Del Rey, Casas, & Ortega (2012) が作成した Web ベースの心理教育 (The ConRed Program) が挙げられる。The ConRed Programとは、規範的社会的行動理論¹⁾に基づくプログラムであり、ヴァーチャル環境内の悪行によって被る損失や法的位置づけを示したり、インターネットのリスクに密接に関連する特定の行為に焦点を当てたり、ある行為がいかに特定の社会集団に反しているか、あるいは受け入れられないように作用しているかを明確にしたりすることを目的としている (Del Rey et al., 2012)。Del Rey et al. (2012) は、11-19 歳を対象に、The ConRed Program による CB 加害・被害の低減効果について、準実験デザインにより検証を行っている。その結果、統制群に比べ、介入群の質問紙上の CB 加害・被害得点が低減したとしている。Slonje, Smith, & Frisén (2012) はこの他にも、Childnet International が作成した Let's Fight It Together (Childnet International, 2013) や Child Exploitation and Online Protection が作成した Exploited (Child Exploitation and Online Protection, 2006) といった映像による情報資源を挙げている。双方とも CB 被害者の観点から CB の発生、CB 被害、CB に関わる人物などが描かれた短編映画であり、CB 被害から受ける精神的苦痛への気づきを促すことで CB 加害に対する予防効果が期待されるが、その効果についてはまだ検証されていない。以上のような取り組みは、潜在的な CB 加害・被害者である生徒を対象とする点から心理教育的アプローチであるといえるが、一方で中村・本庄・橋本・三島・黒川・吉田・長谷川 (2013) は、中高生における CB の予兆や発生を検出するツールを開発している。このツールは、中高生向けのソーシャルメディアのサイト上で提供されるサービスの 1 つであるマイリンク等での友人関係を表す Contact Network とサイト上における相互行為 (e.g. ブログへの書き込みと応答) を表す Activity Network という 2 つのソーシャルグラフの抽出とその可視化機能を備えており、CB の予防ツールとしての利用可能性が示唆されている。また、その効果は検証されていないが、子どもの Facebook 上の危険な行動を親がモニタリングできる Parental Guidance という無料の携帯端末用のアプリケーションが存在する。Parental Guidance では、子どもの Facebook 上の言動に加え、友人関係、写真、個人情報を親がモニタリングできる点、子どもが CB の加害者および被害者になることを防ぐことが期待できる (GoGoStat, 2011)。

先行研究の課題と今後の展望 まず、介入内容の課題としては、必ずしも CB を理論的に捉えた上での介入内容

でなく、介入のどの側面が CB に有効であるか判然としていない点が挙げられる。KiVa や The ConRed Program はいじめにおける集団規範に主眼を置いており、これらのアプローチに CB 加害の低減効果が認められたことから、CB においても集団規範が重要な要素であることが考えられるが、KiVa による CB に対する介入の効果量が中程度であった (Williford et al., 2013) ことから、集団規範に主眼を置くアプローチ以外の介入要素が必要であることも示唆されている。今後は蓄積されつつある CB の知見に沿った介入内容の策定が望まれる。また、効果研究の研究デザインの課題については、内的妥当性が担保されていない効果研究が多いこと、更に、効果研究ごとに CB を測定する尺度が異なっていることが挙げられる。今後は、内的妥当性の高い研究デザインを用いた効果研究の実施や、信頼性および妥当性が保証された CB 測定尺度の作成が望まれる。

総合考察

以上、ネットいじめ (CB) の理解と対応に関する国内外の研究を 2 部にわたって概観した。以下では、第 I 部と第 II 部を通して明らかになった CB に関する基礎研究およびその介入と効果研究の限界を指摘した上で、今後の CB 研究の展望について考察を加える。

第 I 部では、CB が TB と行為の意図性においては共通しているながらも、行為の反復性と力の不均衡の様相の点で異なることが示唆された。これらの相違点は、いじめが行われる文脈の違いに起因していると考えられる。今後は、ネット空間が持つ特徴のより詳細な検討に基づいた現象理解が望まれる。また、本論考では主に国外の研究を概観したが、いじめの様相に文化差がみられることを鑑みると、国外の CB 研究の知見を本邦のいじめ理解にどの程度応用するかについては、今後十分に検討していく必要がある。

第 II 部では、CB に対する介入は、従来のいじめ対策プログラムが応用されており、CB 加害意図を低減させていることから、従来のいじめ対策プログラムも CB に有効であることが示唆されている。しかし、TB に対する介入プログラムである KiVa の CB 加害低減効果は中程度であり、CB 加害の低減にあっては従来のいじめ対策以外の介入要素を検討していくことが今後は必要であろう。

CB は学校の敷地内を超えた問題であるため、今後は学校関係者だけではなく、社会全体で実態把握に努め、対応していくことが不可欠であろう。

注

- 1) 人間の行動は知覚された社会的規範の影響を受けると仮定する理論のこと。

引用文献

- 安藤美華代 (2009). 中学生における「ネット上のいじめ」に関連する心理社会的要因の検討 学校保健研究, **51**(2), 77-89.
- Andreou, E. (2001). Bully/victim problems and their association with coping behavior in conflictual peer interactions among school-age children. *Educational Psychology*, **21**, 59-66.
- Banerjee, R., Robinson, C., & Smalley, D. (2010). Evaluation of the Beatbullying Peer Mentoring Programme. Report for Beatbullying: University of Sussex.
- Bauman, S. (2008). The association between gender, age, and acculturation, and depression and overt and relational victimization among Mexican American elementary students. *Journal of Early Adolescence*, **28**, 528-554.
- Bauman, S. (2010). Cyberbullying in a Rural Intermediate School; An Exploratory Study. *The Journal of Early Adolescence*, **30**(6), 803-833.
- Beatbullying (2002). WHO IS ON THIS SITE? <<http://www.beatbullying.org/gb/who-is-on-this-site/>> (2014年3月7日)
- ベネッセ教育情報サイト (2013). 「ネットいじめ」深刻化する現状に専門家が警鐘<<http://benesse.jp/news/kosodate/safety/20131216120038.html>> (2014年3月8日)
- Beran, T., & Li, Q. (2007). The Relationship between Cyberbullying and School Bullying. *Journal of Student Wellbeing*, **1**(2), 15-33.
- Bonanno, R.A., & Hymel, S. (2013). Cyber Bullying and Internalizing Difficulties: Above and Beyond the Impact of Traditional Forms of Bullying. *Journal of Youth Adolescence*, **42**, 685-697.
- Calvete, E., Orue, I., Estevez, A., Villardon, L., & Padilla, P. (2010). Cyberbullying in adolescents: Modalities and aggressors' profile. *Computers in Human Behavior*, **26**, 1128-1135.
- Campbell, M.A. (2005). Cyber bullying: An old problem in new guise? *Australian Journal of Guidance and Counselling*, **15**, 68-76.
- Child Exploitation and Online Protection (2013). Exploited<<http://ceop.police.uk/Media-Centre/Press-releases/2013/School-best-place-to-learn-about-sexual-exploitation/>> (2014年3月8日)
- Childnet International (2013). Let's Fight It Together<<http://www.childnet.com/resources/lets-fight-it-together>> (2014年3月7日)
- Chisholm, J.F., & Day, S.K. (2013). Current trends in cyberbullying. *JOURNAL OF SOCIAL DISTRESS AND THE HOMELESS*, **22**(1), 35-57.
- Crick, N.R., & Grotpeter, J.K. (1995). Relational Aggression, Gender, and Social-Psychological Adjustment. *Child Development*, **66**, 710-720.
- Del Rey, R., Casas, J.A., & Ortega, R. (2012). The ConRed Program, an Evidence-based Practice. *Comunicar* (39), 129-137.
- Erdur-Baker, O. (2010). Cyberbullying and its correlation to traditional bullying, gender and frequent and risky usage of internet-mediated communication tools. *New Media Society*, **12**(1), 109-125.
- Fanti, K.A., Demetriou, A.G., & Hawa, V.V. (2012). A longitudinal study of cyberbullying: Examining risk and protective factors. *European Journal of Developmental Psychology*, **217**, 182-188.
- Gamez-Guadix, M., Orue, I., Smith, P.K., & Calvete, E. (2013). Longitudinal and Reciprocal Relations of Cyberbullying With Depression, Substance Use, and Problematic Internet Use Among Adolescents. *Journal of Adolescent Health*, **53**, 446-452.
- GoGoStat (2011). Parental Guidance<<http://www.gogostat.com/pg>> (2014年3月7日)
- Grigg, D.W. (2010). Cyber-Aggression: Definition and Concept of Cyberbullying. *Australian Journal of Guidance & Counseling*, **20**(2), 143-156.
- Haynie, D.L., Nansel T., Eitel, P., Crump, A.D., Saylor K., Yu K., & Simons-Morton, B. (2001). Bullies, Victims, and Bully/Victims: Distinct Groups of At-Risk Youth. *The Journal of Early Adolescence*, **21**(1), 29-49.
- Juvonen, J., & Gross, E.F. (2008). Extending the School Grounds? —Bullying Experiences in Cyberspace. *Journal of School Health*, **78**, 496-505.
- KiVa Anti-Bullying Program (2012). Pro-

- gram<<http://www.kivaprogram.net/program>>
(2014年2月28日)
- Kowalski, R.M., & Limber, S.P. (2007). Electronic Bullying Among Middle School Students. *Journal of Adolescent Health*, **41**, S 22-S 30.
- Kowalski, R.M., & Limber, S.P. (2013). Psychological, Physical, and Academic Correlates of Cyberbullying and Traditional Bullying. *Journal of Adolescent Health*, **53**, 513-520.
- Langos, C. (2012). Cyberbullying: The Challenge to Define. *CYBERPSYCHOLOGY, BEHAVIOR, AND SOCIAL NETWORKING*, **15**(6), 285-289.
- Lee, M.S., Wu, Z.P., Svanstrom, L., & Dalal, K. (2013). Cyber Bullying Prevention: Intervention in Taiwan. *Plos One*, **8**(5)
- Li, Q. (2006). Cyberbullying in schools: A research of gender differences. *School Psychology International*, **27**, 157-170.
- Li, Q. (2007). New bottle but old wine: A research of cyberbullying in schools. *Computers in Human Behavior*, **23**(4), 1777-1791.
- Menisini, E., Nocentini, A., Palladino, B.E., Frisen, A., Berne, S., Ortega-Ruiz, R., Calmaestra, J., Scheithauer, H., Schultze-Krumbholz, A., Luik, P., Naruskov, K., Blaya, C., Berthaud, J., & Smith, P.K. (2012). Cyberbullying Definition Among Adolescents: A Comparison Across Six European Countries. *CYBERPSYCHOLOGY, BEHAVIOR AND SOCIAL NETWORKING*, **15**(9), 455-463.
- 文部科学省 (2006). 平成18年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査.<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?_toGL08020103_&tclassID=000001017157> (2014年3月9日)
- 文部科学省 (2013). 平成24年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査.<http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afiedfile/2013/12/17/1341728_01_1.pdf> (2014年3月8日)
- 森田洋司監修 (2001). いじめの国際比較研究：日本・イギリス・オランダ・ノルウェーの調査分析 金子書房.
- 中村海・本庄勝・橋本真幸・三島浩路・黒川雅幸・吉田俊和・長谷川亨 (2013). 人間関係を推定するフレームワークに基づくネットいじめ防止ツールの実装 情報処理学会第75回全国大会, 27-28.
- NCH (2005). *Putting U in the picture—Mobile phone bullying survey 2005*.<http://www.avaproject.org.uk/media/28482/mobile_bullying_report.pdf> (2014年2月1日)
- Olweus, D. (1993). *Bullying at school: What we know and what we can do*. Oxford: Blackwell.
- Olweus, D. (2012). Invited expert discussion paper Cyberbullying: An overrated phenomenon? *European Journal of Developmental Psychology*, **9**(5), 520-538.
- Ortega, R., Elipe, P., Mora-Merchan, J.A., Calmaestra, J., & Vega, E. (2009). The emotional impact on victims of traditional bullying and cyberbullying: A study of Spanish adolescents. *Zeitschrift fur Psychologie/Journal of Psychology*, **217**, 197-204.
- Rivers, I., & Noret, N. (2010). 'I h8 u': Findings from a five-year study of text and email bullying. *British Educational Research Journal*, **36**, 643-671.
- 島田徳子・ハリソン, R. (2001). インターネットを利用した Constructivist タスク型教材 —“Web-Quest” の紹介と実践— 日本語国際センター紀要, **11**, 13-30.
- Slonje, R., & Smith, P.T. (2008). Cyberbullying: Another main type of bullying? *Scandinavian Journal of Psychology*, **49**, 147-154.
- Slonje, R., Smith, P.K., & Frisén, A. (2012). The nature of cyberbullying, and strategies for prevention. *Computers in Human Behavior*, **29**(1), 26-32.
- Smith, P.K., Mahdavi, J., Carvalho, M., Fisher, S., Russell, S., & Tippet, N. (2008). Cyberbullying: Its nature and impact in secondary school pupils. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **49**, 376-385.
- Sourander, A., Klomek, A.B., Ikonen, M., Lindroos, J., Luntamo, T., Koskelainen, M., Riskari, T., & Helenius, H. (2010). Psychosocial Risk Factors Associated With Cyberbullying Among Adolescents A Population Based Study. *Arch Gen Psychiatry*, **67**(7), 720-728.
- Tokunaga, R.S. (2010). Following you home from school: A critical review and synthesis of research on cyberbullying victimization. *Computers in Human Behavior*, **26**, 277-287.
- 内海しょか (2010). 中学生のネットいじめ、いじめられ体験—親の統制に対する子どもの認知、および関係性

- 攻撃との関連— 教育心理学研究, **58**, 12-22.
- Vandebosch, H., & Van Cleemput, K. (2008). Defining Cyberbullying: A Qualitative Research into Perceptions of Youngsters. *CYBERPSYCHOLOGY & BEHAVIOR*, **11**(4), 499-503.
- Wang, J., Nansel, T.R., & Iannotti, R.J. (2011). Cyber and Traditional Bullying: Differential Association With Depression. *Journal of Adolescent Health*, **48**, 415-417.
- WebQuest (2007). <<http://webquest.org/index.php>> (2014年2月28日)
- Williford, A., Elledge, L.C., Boulton, A.J., DePaolis, K. J., Little, T.D., & Salmivalli, C. (2013). Effects of the KiVa Antibullying Program on Cyberbullying and Cybervictimization Frequency Among Finnish Youth. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, **42**(6), 820-833.
- Ybarra, M. L., & Mitchell, K. J. (2004). Youth engaging in online harassment: associations with caregiver-child relationships, Internet use, and personal characteristics. *Journal of Adolescence*, **27**, 319-336.
- Ybarra, M.L., Espelage, D.L., & Mitchell, K.J. (2007). The Co-occurrence of Internet Harassment and Unwanted Sexual Solicitation Victimization and Perpetration: Associations with Psychosocial Indicators. *Journal of Adolescent Health*, **41**, S 31-S 41.

(指導教員 下山晴彦教授)